

幼稚園令の讀み方

— 講 演 大 要 筆 記 —

倉 橋 惣 三

本年は幼稚園令が新たに定まりました。お互に大變よろこばしいのでありますが、その令に付いて少しばかり話を申し上げようと思ふのであります。但し御承知の如く新しい令は其の内容におきまして從來の幼稚園規定とそんなに違ひはなく、殊に所謂教育的内容は違つて居りませぬ。従つて從來幼稚園で考へられて居たものが新幼稚園令によつて根本的に別の問題を起こすと云ふことはありません。

先づ一通り幼稚園令を基とした解釋をたどることが便利だと思ひます。そこで今回は三ツの問題即ち一、幼稚園の目的に關する事項。二、保育項目。三、幼稚園の社會的機能に付いて考へて行き度と思ひます。

一、幼稚園の目的に關する事項

目的に就いては古い幼稚園の規定では、極く形式的な言ひあらはし方であるに對して、新幼稚園令は内容的に示されて居ります。而して其の内容は、舊規定に於て幼稚園の教育方法を指し示す條項として擧げられてゐたものですが、方法の規定を目的の表示に移したところに法令のこゝろとして自づから差

別があります。

ところで、私はこの第一條について斯う云ふ點を考へて居る。新幼稚園令の特色は幼稚園の社會的意義を最も高めた所にある。平たくいへば從來幼稚園といふ名でなく社會的仕事として考へられて來たことが幼稚園の名で行はれることになつた事です。この意味がどしどし徹底普及することを勿論希望するが、此處に考ふべきは幼稚園が社會的意義に偏して來ると、その本來の教育的目的が稀薄になる危険がないでもない。非常に苦勞性に考へて見るのでありますが、これは從來社會事業としての保育事業を見てさう思ふのです。社會事業其のものに非難を試るものではありませんが、幼兒生活の目前の危急を救ふために教育的目的が第二になることが從來あつたのであります。私共の心配することはその點であります。社會的職能は勿論大切である。私も後に之れを充分に力説しようとして居るのですが、それを以て粹純なる教育的目的を少しでも犠牲にしてはならない。幼稚園は何處までも教育事業なのであります。單純に子供を預つて衣食の世話をする所ではありません。この關係から新令が特に教育的内容を以て第一條としたことに可なり強い意義があると考へられます。繰り返して申せば從來の規定の様に、幼稚園は學齡前の子供を教育する所だといふよりは餘程教育的に目的を強く明かにして來たといへる。これは或は今日の皆さんに必要ではないでせうが、幼稚園の將來を思ひますとかなり意味深きものと思ひます。

さて『第一條、幼稚園ハ幼兒ヲ保育シテ其ノ心身ヲ健全ニ發達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育

ヲ補フヲ以テ目的トス』といふに對して、一つ一つの言葉に注意を向けますと、先づ第一に「心身ヲ健全ニ發達セシメ」とは如何なる意味でせうか。常識的に分つたことでありますが二つの注意すべき點があると思ふ。一は身體の健全といふことであります。この身體の問題については新令は只第一條に於て一度言ふのみ、他の何處にもない。この意味からして新令の全體を通じて色んな事が説いてあるに關らず身體の條項が足りないの感を持つ人があります。殊に近來の多くの外國の新しい幼稚園令はむしろ身體の方によく注意して居ります。英國のナーセリー、スクールを見ましても先づ身體に重きをおいてそれに添へて精神の保育もしなければならぬとしてあります。今度の我が令を見ますと身體衛生の項は殆んどない。少くも法令の言葉の上に於ては多く舉げてない。この意味からして此の第一條のたつた一字ではあるが、この言葉は相當に注意して見なければなりません。たつた一字なれば特にこの意味を明らかにしておく必要があります。小學校令を見ますと「心身ノ發達ニ留意スル」とあります、即ち心身の健全なる發達其の者を表面の條項にあげず、外の事を舉げしかも「留意シ……」としてある。小學校教育としても斯んな消極的では物足りない。目的として舉げられなければと云はれて居りますが、幼稚園は留意でなくて發達させることが表面の目的となつて居るのであります、時經てこの言葉に慣れて來ますと一句一句を不容易に見逃し易いのでありますか、「身體ヲ健全ニ發達セシメ」は重要な一の積極的目的をなして居るのであります。

それから「心ヲ健全ニ發達セシメ」の意味は如何。これも亦分り切つたことですが、細かにいへば、斯んなに讀む必要があると思ふ。即ち、其の次の言葉に「善良ナル性情ヲ涵養シ」とある。これは「心ヲ健全ニ發達セシメ」と別な言葉ではないかとも見られる。凡そ法令といふものはいわゆる文章でない一字と云へども不要なものは附けてないのです。其處でそれが何んなに區別あるかを明らかにしなければならぬ。私の解し方は「心ヲ健全ニ發達セシメ」はいわゆる自發的活動即ち精神の強い自發力を内容として居るものと見る。「善良ナル性情……」は勿論自發と別なことではありませんが、むしろ内容的價値を主として居ります。つまり、心の教育に關し、重要な二方面を對立させてあるのです。私共が幼稚園令の出づるに對して希望を論じあつた時に、幼稚園教育は専ら自發的活動を主とすべきで外から色づけ形づけるのは第二の問題である。幼兒の自發活動を存分に發揮させればよいので、外から形づけることは近來の教育主義に適はないといふ傾向の意見が随分出ました。殊に舊規定で「……習慣ヲ養ヒ……」といつてありましたが何となく古くさい感じがある。外から躰けて型をこしらへる響がある。下新しい本旨に添はぬ。だから「幼兒をして自發の生活を十分ならしめる事」といつた風のことで目的を示した方がよいといふ極端な意見もありました。其れ程新らしい幼兒教育は自發活動の健全を要求して居る譯なのです。すなはち、心の健全なる發達とは心の内容が何うあるかといふよりも、心の強さが主であります。幼兒の心の強さは自發活動と同じであります。漠然と考へれば何でもありませんがこういふ風に

考へられるのです。

そこで自發の心の強さを「心ノ健全ナル發達」の方にに入れて、さて其の次「善良ナル性情……」といふことになるのですが、此問題についても色々の議論が出ました。自發主義、殊に自由主義、自然主義の人からは、善良といふことは吾々に誤謬を起させる。善良といふ事は完全に近い言葉であり、善良といふ言葉を使ふと完全といふ方にばかり氣がとられる。ところで、完全は出來上りの結果でありますから、これを幼稚園教育に註文することは幼稚園教育の本旨に合はない。子供は自然のまゝに育て、行けばそれでよいので此方から其ういふことを要求するのは害がある。言ひ換へれば大人の標準が子供を律するからいかぬといふ風の極端な意見も多くありました。しかも、幼稚園令の規定する所では自發活動と共にはやはり善良なる性情をはつきり擧げてあるのです。即ち、第一條に於て、自由放任主義は斷じて禁じられて居るのです。やはり吾々の要求する善良を求めて居るのです。之れは意味を籠めて讀むべき點です。處で此の言葉は舊規定のまゝにはなつて居りません。善良なる習慣が性情に代つて居ります。大して違つたことでもないと思はれませうが、習慣には外から與へる響あるに對し、性情はどこ迄も内容的、實質的であります。又、善良と性情を「ナル」で結びつけてありますが、これを善なる性情といふ一つの事に讀み度い。即ち幼兒の性情といへば生活を離れてはない。有りのまゝを離れては幼兒の性情はない。性情をはなれて性情を善にするといふのではなくて幼兒の善なる性情を問題にして行くといふので

ある。つまり、善良といふ言葉を幼児生活を離れて考へてはならない。幼児としても善良さは何かといふことに局限しなければならぬ。言ひ換へれば如何に善なる性情と名付けられるものでも、餘り立派な聖人君子の様な完全な善性情は幼児には求められない。善は倫理學の殊に理想主義的倫理學の大人の生活に求めるものでありますから、斯様なものをそのまま幼児に求めることは幼児の生活に適合しないことは先述のとほりです。そこで幼児性情に就ての特別な研究が必要になります。

其の次に第一條を見ますと「家庭教育ヲ補フ…」とある。これは前規定にもありましたが今日の新令では一層廣く深い意義を持つて來たものと思はれます。廣くとは、從來の幼稚園が社會的の職能を持つて居なかつた時には、社會の一部の家庭教育を補つて居ましたが、新令に基づけば全體の家庭をめぐして居るのであります。大變に廣い意義になる譯です。そこで私は第一條を斯様に見ます。前の「心身ヲ健全ニ發達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ」は個々の幼児についていふことで、「家庭教育ヲ…」國家的に社會的にいつて居ることだと差別して讀みます。それから、深さとしては、幼稚園が社會的職能を發揮する時は當然家庭生活上の缺陷を補ふために活動しなければならぬ。併しこれは本來ではない。家庭生活を補ふのに懸るのでなくて、幼稚園教育は家庭生活にまで徹底しなければならぬからのことであり、此處を嚴重に分つておく必要がある。食物を與へ、衣服を供することも要するに教育の一手段として考へられるのであります。「家庭教育ヲ補フ」は斯様に從來とは廣さ深さに違ひあることを認めなければなりません。

ん。念入りに見た時の解釋であります、尙、幼児の善良なる性情については次に述べることにします。

昨日申し忘れましたが私の今度の話は新令に關する註釋ではありません。完全な細い註釋を試るのではありません。そういふことは短時間で私のするべき問題ではありません。こゝには、たゞ幼稚園令を實際上より考へる注意として、それ〴〵の點につき重要と見るものを抜いてゆくのであります。

昨日につゞきまして、幼児としての善良なる性情は何う解釋するか。幼児に希望するものを完全に羅列すると非常に多大なものになります。そこで、昨日も申した通り、「幼児としての善良なる性情」として何ういふことを特に主として考ふべきかにつゞきまして、思ひ付きの點を挙げます。その第一としては斯ういふ考察をして行き度い。幼児なればまだ本當の意味に於ける完全した道徳生活は要求出来ない。道徳に對する正しき理解とそれを實行する要件がまだ具はらない、殊に大人に於ける場合は實行を以て重要事とするが、幼児ではそれが六かしい。故に、幼児としては、今現に、どれだけの道徳條件を具へて居るかといふことは、大した問題には出來ない。そこで、私は、少し違つた方面から此の問題を眺めて見たい。すなはち、幼児の場合には、幼児が今どれだけの善良さを具へてゐるかの前に、幼児がどれだけ、善を受け取り易き性質を持つて居るかといふことで考へてゆきたい。例へば畑を見て、今どれだけ美しい花が咲いて居るかでなく、どれだけ良い種を受け取り得る様になつてゐるかを主にしたい。幼

兒の心が既にどれだけの美しい花を持つて居るかでなくて、美しい花の種を受け取り得るやうに耕されてゐるかを考へるのです。大人の場合でも此の考へは大切だと思ひます。私の考では善なるものは外に澤山ある。その善をよく受取り得る様によく耕されて居ることが誰れの心にも必要なのであります。まして小さい幼兒に於ては既に善良であるといつたところで知れたもので、人間生活に入つてまだ僅かの事です。むしろ無限の善を容易に受取つてゆき得る處に望みがあるのです。乾き切つた死石の様に、良い種をはね返したり、枯したりするやうなことがなく、しつとりと良い種を培ひ得る様に柔かに耕され、うるをひを與へられてあり度いのです。周りの人間から善良なる心持を容易に受取り得る、即ち好意を受取り易い性質、外からの好意を引き外さずして素直に受けとれる性質、それが持たしたいのです。そんな事は何でもないと思はれるかも知れませぬが、吾々人間生活として可なり六づかしいことではありません。何でもいゝ種が受取れる土は地球上に少いのであります。多數の人間は人の好意を直に受取り得る様に耕されてはゐない。色んなものが素直に受取れることを妨げます。ひがみ、そねみ、邪推、嫉妬、裏を穿鑿するまわり氣のみならず、そのまゝ受けては人に負けてる様な、人の親切を受けるのがくやしいといつた、頑な自我の態度があります。それが子供の場合には如何になつてゐるかと考へますに、勿論全體として私共の様な頑な心と違つて軟い心素直な心であります。併し案外に子供相當のそねみ、ねたみ或は勝ち氣、負けぬ氣がある。利かぬ氣、負けん氣は面白いものではありませんが人の好意を受取るのに

屢々邪魔です。幼稚園に來る前に人から何うされたのか、又は本來その子の性であるのか、吾々の傍に來る前に、既に、そんな心になつて居るものが少くない。これは幼兒の心を悪く云ふのではない。若しも幼兒がどれだけの善い事をするだけにあるかを考へるならば問題にはならないが、善を素直に受取れるかといふ點に於ては、これが意外に氣になる。幼兒の性情として最も氣になることと思ふ。

そこで、その好意を受取れる心を如何にして幼兒に養ふかの問題でありますが、第一、吾々が好意を子供に充分與へてやる、絶えず好意を経験し得る周圍、環境であらしめたい。好意は好意にして必ずしも幼兒の心に完全な道德的影響を與へることとは區別があるのです。善の教者は子供の手本です。自分の持つ小さい善でも子供に與へなければならぬ。これは勿論大事でありますが、私のこゝに申してゐるのはそれと違ひます、與へる教へるでなくて、好意其の者を與へるのです。好意とは子供自身に向つてしむける所の好意であり、善とは子供と自分との關係でなしに考へられるものであります。好意はその子に與へられる個人關係でありますから、その幼兒に對して一般的の原理を持ち出さぬことも其の一であります。一般的の規則を適用しようとするやと批判、審判になる。それではならぬのです。好意の特色はどこまでも一般的、普遍的善と違ひます。善が多少崩れても個人的感情に徹底していく處に、好意の眞實性があります。私共の子供に對する態度は必ずしも冷淡ではない。併し時々、其の子供を子供として個人的に見ない。一般的な原理を以てさし向ける爲に、眞の好意が十分行はれて居ない時もあらうかと

思ひます。子供を教育しようと思つてゐない時ならば、樂々と出来るかも知れぬが、教育感を持つと自づと一般的の標準を以て其の子を批判する様になり易い。殊に善良性を養ふといふことになる、一層陥り易いことであります。

次に幼児に向つての好意が更に深く徹底すれば「ゆるし」となります。ゆるしは法を適用して許すこともありませんが、好意から出るゆるしは其の幼児に即して一般原理の適用を忘れるといふことにあります。一般法則を以て責る心が起らないから、其の子供のその時の心に對して無限のゆるしの心が持てるのです。ゆるしは或は宗教的の意味に考へれば六づかしい事であります。言葉としては美しいけれども中々行はれ難いことです。しかしそれとは暫く區別して、極めて簡單に、好意があるから許すといふことは六づかしいことではなからうと思ひます。けれどもこれも實際的には中々出来ない。ともすれば、凡べて一般的に律するといふ様になる。いわゆる教育的責任感が吾々にある以上、どうもそうなり易い。

幼児は左様な許しを受ける度に人の好意を受取り易くなります。例へば子供が花壇で花を摘み採る所を見られた時、子供自身悪い事をしたと感じて居るでせうに、花を採り度いと欲した子供の純個人的生活に即して見る時には、無理もないと理解が起る。その心をそのまゝに表はして「欲しかつたでせうね」と云つたなら道徳上からはルーズなど非難されるかも知りませんが、其の子は罪を許されたつていふ細やかな經驗をしますので。或は家庭などで御客様の御歸り後お茶碗を持つて茶の間にかけて出す。途中で

轉んでこはす。一般的立場からは裁かなくてはなりません、女中の手助けに持つて行かうとした。一つ宛運べばよいものを熱心の餘り一時に持つて、しかも驅け出したその心根を汲みとつて「困りましたね」つて言つてやる。その他のことは一切見ない。幼児の目の中には現にこんなに困つてゐる私を何故見てくれないのかとのうらみが見える。辯解しようとする態度がまだ出ない前であります。この態度の出ない前に幼児の困つてゐる心持を汲みとつてやれば幼児は純粹な感情でワーツと泣いて抱きついてまゐります。斯様な關係を私はゆるしといはうとするのです。從來の教育の仕方では甚だ認められないことでした。從來の幼稚園の先生の困り迷ふ問題は、何分賞めて何分叱るかでありました。賞罰の割合について古くから苦勞してゐられるのです。何故思ひきつてゆるしませんか。賞罰を感じながらしないのではない。初めからゆるしの心に出ませんか。如何にして罰すべきか、賞すべきかからはできない。先生自身が其の時直ぐに心持を汲取つてゐなければ眞實にならない。但し、一寸見たところゆるしはえこひいきになり易いが可愛い子には寛大、鼻垂らしには嚴といつた風のえて勝手の許しとは似て非なるものであります。この許しが潤澤に與へられるか、或は一回でもいへども大きな効果を來すのです。人を受ける廣い心に開かれてゆくのです。一回といへども大きな効果を來すのです。

第二には子供が吾々に向つて表はす好意を私達が十分に受取ることです。子供は勿論さつぱりしたものでありますから、濃厚な情愛を持つものではない、簡單です、けれども淡いながらに、しばし小さ

い好意をほの見せる。それを一つもらさず受取つてやる、一つの好意と雖も受取られずに終らせぬやうに細かい注意が肝要であります。例へば先生が手技をしてゐる。のりが要る時傍に見てゐた子供が感付いて飛んで行つて鉄を持つて来る。これ好意であります。間違つてもその好意は十分汲みとらなければなりません。或は私共がいろいろ忙しくして勞れてゐる時に寄つて来て、團扇であふぐものもありませうが、中には其處まで動作に表はさぬ子もありませう。離れてぢつと見てゐる子の心中も十分汲み取つてやり、良解し得る注意さがなければなりません。小さい好意でも受取られることを経験する時第二、第三の好意を持ち得、次第々々と益々好意に満ちて来る。

實際上より見ますに、幼兒達で、此許しの経験を受取つた経験を持つものが餘りに少ないのであります。或は折角示した好意が曲解さへされた境遇も多いのです。手近い言葉でいへば、子供をして人間にこり／＼させて居るのも見られるのです。自分が折角眞實を以て理解して貰へようとする時に誤解される。これが三才、四才から屢々経験されるとしますれば、自然、人間を拒絶するところまではいかなくとも、人間を防ぐやうにはならざるを得ません。自分を守るのは、外から悪いものが来た時には大切な事でありますが、外から来る善いものを受取り易くしようとする立場からは憂ふべきものであります。子供に向つて幼稚園の期間二年乃至三年に、どれだけ善いものを教へられるかは知れたものでありますけれども、人間に對する窓を開いてやることは吾々によつて出来るのであります。既に斯う云ふ時に邪推

そねみが出来たものは、少年期、青年期には直すことは實に困難です。一度頑なになつた性癖を軟かくすることは六つかしいのです。だから幼稚園教育に於て、特にこの意味での性情教育の重要さがあるのです。

理想主義の見方をすれば世には悪の方が多し。審く心でものを見るならば善は世にない。紙屑屋の様にえり分ける時に世の中に果して何れだけの善がえり出せませうか。しかし、凡てものを善にうけとつてゆく。即ち善解の態度を以てしますと、同じ世の中が、到る所、凡て善であります。この事について私は他の方面から話をして見ませう。即ち今までは主として善について考へて來ましたが、これを美に置きかへたらばどうでせう。審美的態度は大切でありますが、美しいものを美しいとして受取り得るのを徹底してゆけば、其の心は伸びて世の中のもの凡てを美解し得るようになる。えらい藝術家になれば吾々が見落してゆく美なるものを見出す力があります。善に對しても同じではありませんまいか。若し同じならば一切に對する善解といふことも養はれるではなからうかと思ふのです。理屈をはなれて子供の中で見ませう、大きく分けて二色に見られます。一人の子は凡てを悪解する。人のする事を何でも難癖つける。告口をする。今一人の子は悪い事が見へないのではないでせうが、氣に付かないのです。善を努めて探すのではない。一見、砂ばかりと思はれる中から、磁石は鐵を引きよせます。善解の心はこの磁石の様なものです。そういふ子どもゝあります。

こゝに現在どれだけの善を持つかよりは、すゝと基本的な善良なる性情が養はれて居ります。善解を他の言葉でいひますと悪を責めず、抱擁することです。子供の場合では考ぐられぬと思ひますが、人間的のよろこび、感謝が心の中に漂ふ時に凡てが善に見られると思ふ。善として見られる事を見得るの他の意味ではないのです。心全體が積極的、よろこび、感謝に満ちてゐる。而してこのよろこびは何處から與へられたかといへば、深い問題にすれば宗教的になるが、併し今は人間の問題としてゐるのであつて、先程のゆるしであります。自分の好意は凡ての人が汲みとつてくれると信する時に凡ての物を責める心が出て來ない。この氣持で養はれた子供は又其の氣持ちで働きかける。循環的な關係が實現して來るのであります。

幼児教育に於て善性はこれだけといふのではない、その中の最も基本的、根本的な一つとして考へたのであります。斯う考へました時に吾々の立場はなかく六づかしい。斯んな性質を持つ人でなければ出來にくいからです。併し、其の子の持つて來る好意を注意深く、十分に受取ればよいのだと考へます時には一面に於て私等の立場も樂になりませう。(未完、きく)